

「ゴフマネスク」とは何か？
— E. ゴフマンの著述スタイルをめぐって —

内 田 健*

What is “Goffmanesque” ? : A Note on Erving Goffman’s Writing Style

Ken Uchida*

Abstract

This paper presents an effort to read a sociological work of Erving Goffman as a textual construct. Goffman is known for his distinctive writing style, sometimes called “Goffmanesque”. The writer’s contention is to suggest that Goffman employed such a writing style as an inevitable consequence of his lifelong theme : investigation of “the interaction order”. As an illustration, Goffman’s early paper, titled “On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure.” is taken up. First, the subject and constitution of the paper is outlined. Then, two rhetorical devices, *metaphor* and *enumeration* are extracted from the text. Lastly, the correlation between Goffman’s writing style and his formal sociological orientation is explicated.

1. はじめに

あらゆる著作物は、ことばの連鎖がおりなすテキストとして構成される。みずからの思考を他者に理解させようとする著者は、思考をことばとして外在化し、ことばを連ねてテキストを生産する工程を経ねばならない。テキストの構成、つまりことばの編制様式には、著作者の思考の流儀がおのずと表白されることになる。

制度上「社会学」という一学術領域に帰属する著作物であっても、事情は変わらない。言語じたいの社会性に着目した研究の蓄積と対照的に放置されてきた、この<社会学的著作におけることば>という問題圏を発見した人びとは、近年、「社会学の詩学 poetics for sociology」というあらた

な探求領域を開拓しつつある (Brown, 1977 ; Clifford and Marcus, 1986 ; Brown, 1987 ; Geertz, 1988 ; Atkinson, 1989)。「社会学の詩学」とは、社会学的な知見 findings の生産というよりむしろその呈示 presentation の現場、すなわちテキストの生産において意識的・無意識的に駆使される方法・技法・慣例を、いわばメタテキスト的に析出する試みである。

ここでは、そうした試みとも問題意識を共有しながら、E. ゴフマンの著作を分析する。ゴフマンは、「相互行為秩序 the interaction order」(Goffman, 1983)というあらたな研究領域の開拓者として20世紀後半の社会学に確固とした足跡を残したが、同時にその一種特異な著述スタイルに

*人間基礎科学科助手

*Department of Basic Human Sciences

よっても知られている。「ゴフマネスク Goffmanesque」という形容詞を鑄造させることにもなったそのスタイルに（意図的か否かはひとまず措くとして）表出している「ゴフマンの方法」とは何か。本稿のねらいは、ゴフマンはなぜあのよう書いたのか、あえていうなら書かねばならなかったのかと問うことによって、ゴフマン社会学のめざしたものとゴフマンの著述スタイルとのあいだに想定しうる相即性をみいだし、ゴフマン社会学の包括的理解にいささかなりとも寄与することにある。

むろん、ゴフマンの著述スタイルに十分な分析をほどこすためには全著作の検討作業を要するが、ここでの課題はそれに先立つ基本的分析視角の提示に限定することとし、ゴフマンの最初期の著作(Goffman, 1952)を「データ」としてゴフマネスクの特質を抽出していくことにしたい。ゴフマンの著作は、そのほとんどが生前刊行された11冊の著書におさめられているが、本稿では、著書に収録されていない数多くの論稿のうち的一篇を素材とする⁽¹⁾。初期論文を取りあげたのは、ゴフマン的な著述スタイルの原型を抽出するねらいによる。すでにゴフマンのデビュー論文(Goffman, 1951)にも特有のスタイルの萌芽をみとめることができるが、紙幅の制限からコンパクトな構成をとっているため、素材として十分なものはみなしがたい⁽²⁾。ここでとりあげる論文は、ゴフマンが学術雑誌に発表したものとしては二本めにあたるが、十分なスペースを活用してゴフマン独特のスタイルが展開されている点で、かれの著述スタイルの祖型をとりだす材料として好適である。また、ゴフマンの業績に通暁するT.バーンズが「主題の選択、中核的主题にアプローチする角度、モラリスト的な語り口、著述スタイルなどにおいて、かれの仕事の特徴として認められることになる要素の刻印を明確にとどめている」点で、この論文がゴフマン固有の仕事のすすめ方を完璧に例証するものだと評釈していることも、素材選択の根拠としたい(Burns, 1992:14-15)。

論述はつぎのような手順ですすめていく。まず2節で本稿で素材とする論文の主題と構成を概観し、ついで3節では、先行研究をふまえながら素

材論文でもちいられているレトリック的技法を考察する。そして4節でゴフマンの著述スタイルとゴフマン社会学の企図との相関性の解明をこころみることにした。

2. 論文の主題と構成

本稿で検討の対象とするのは、「カモの頭を冷やすこと 不首尾な事態にたいする適応をめぐる On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure」と題された論稿である(Goffman, 1952)⁽³⁾。

論文の主題は、「関与 involvement」概念を手がかりに自己 self 現象の一樣相を考察することにおかれている。関与とは、ある個人が一群の価値や属性(地位・役割・能力・資格・個性など)の持ち主であることが、社会的に、つまり自分だけでなく他者からも承認されている状態を意味する⁽⁴⁾。ゴフマンのいう「自己イメージ self conception」は、そうした諸関与の総体または一部にほかならない。したがって、Aの自己イメージには、Aが自分の関与について抱くイメージ(対自的自己イメージ)と他者がAの関与について抱くイメージ(対他的自己イメージ)とが包含されることになる(p.486)。両者が相似たであれば社会的相互行為は円滑に遂行されるが、ゴフマンの視線は逆に、二つの自己イメージの相似性が崩壊した問題状況で生じる諸事態にむけられる。すなわち、もくろみが不首尾な結末をむかえた当事者が関与を剥奪されるような問題状況の修復はどのように図られるのか。傷ついた自己イメージはいかにして回復の方向性を与えられるのか。副題が指示しているのはそうした問題意識である。

具体的な議論の順序を俯瞰するために、ここで論文の全体構成を示しておこう。節番号はとくに与えられていないが、行あけによって8つのセクション(ここではかりに【§n】と表記する)が区切られている。

【§1】(pp.483-6)

主題と分析用語の提示

cool the mark out という言い回しの導入と拡張

【§ 2】 (pp. 486-490)

「関与 involvement」概念の定義

「関与」喪失の社会的場面を類型化

①昇進

②退職

③不本意な剥奪

a. 当事者の不名誉となる剥奪

b. 当事者の不名誉とはならない剥奪

「社会における自己」をめぐる4つのテーマ

(【§ 3】～【§ 6】に対応)を提示

【§ 3】 (pp. 490-2)

多様な対面的状況における「カモ」を例示

①サービスに不満を示す顧客

②官僚制的組織への加入・昇進をはばまれた志願者

③相手から拒絶された求愛者

【§ 4】 (pp. 492-6)

cooling out の方法を類型化

①適任者に冷却をまかせる

②代替的関与を提供する

③不首尾に終わった課題に再挑戦する機会を与える

④鬱屈した感情を発言や行為として表出させる

⑤あらたな自己イメージに馴染むまでの時間を与える

⑥「詐欺師」と「カモ」が共謀し、不首尾を隠匿する

【§ 5】 (pp. 496-8)

cooling out を拒んだ「カモ」がとりうる方策を類型化

①不快な感情をあからさまに示す

②トラブルを処理する立場にある人物や機関に訴える

③課業にたいする熱意や思い入れを失う

④失った関与を補償する別の関与を獲得する

⑤不首尾にたいする釈明や弁解を案出する

【§ 6】 (pp. 498-500)

cooling out の場面を回避する戦略を類型化

①詐欺師側の戦略

a. 関与不適格者をあらかじめ選別・排除する

b. 不首尾な事態など生じていないふりをする

②社会通念の機能

c. 未熟練者の不首尾への寛容的態度

③カモ側の戦略 (不首尾にたいする口実・面目の保持)

d. 関与に固執していることをはぐらかす

e. 失った関与への固執を自他双方から秘匿する

f. いくつかの関与に足をかけておく

g. 関与へ固執するような態度じたいをひやかす

【§ 7】 (pp. 500-503)

「社会における自己」をめぐる論点揭示

①自己イメージの保持は他者の了解を要件とする

②個人の所持する諸関与はゆるやかに統合されている

③社会的人格は、制度的に、また情緒的に互に関係しあっている

【§ 8】 (pp. 503-505)

「社会的関与の喪失」が帰結する事態についての課題提起

①分離

a. 地理的・空間的分離

b. 制度的・職業的分離

②混在

階層的上昇移動と下降移動

タイトルに掲げられている cooling the mark out は、プロの信用詐欺集団の世界で流通する隠語に由来する。論文の冒頭から登場する「詐欺師 operator」「なだめ役 cooler」「カモ mark」といったことばもすべて、E. サザランドやD. モーラーの先駆的研究が明らかにした犯罪者集団の *in vivo code* である。「詐欺師」一味は「カモ」からまんまと金品をまきあげたあとで、被害に気づいた「カモ」が騒ぎ立てたり警察に訴えたりし

ないよう予防策を立てる必要がある。そこで一味の一人が「なだめ役」となり、手管を駆使してカモを落ち着かせる。この過程が「カモの頭を冷やす cool the mark out」と呼ばれる (pp.483-4)。いいかえれば cooling out とは、自分には騙されたりしないだけの如才なさが備わっているという「カモ」の自己イメージに与えられた損傷を修復する過程である。

ゴフマンはここで「カモ」の指示対象を、さまざまな社会的場面 social setting でさまざまなきっかけから自己イメージを傷つけられたあらゆる人物へと拡張する (p.486)。「詐欺師」や「なだめ役」の役回りも、最初から悪意的に「カモ」の自己を危殆に陥れようと企図した者だけでなく、「カモ」への善意が結果としてそうした事態を招く結果になった人物にも割りふられることになる。こうして、cooling the mark out という特種な社会過程のなかから他の社会過程にも通有的な generic 要素が抽出され、ある関与から撤退せざるをえなくなった人物に自己イメージの変容をいかにして受容させるか、という論文の主題を追究するためのモデルとして導入された。

ここで確認しておきたいのは、さりげなく導入された犯罪集団の日常表現が、多様な社会的場面の分析装置へと巧妙に仕立てあげられていることである。次節では、こうして組み立てられた道具立てを活用すべく動員されるゴフマンのレトリック装置のなかから、かれの社会学的分析ともっとも密接に相関する二つの手法について検討を加えたい。

3. 方法としてのレトリックメタファーと列挙法⁽⁵⁾

(1) メタファー

ゴフマネスクに論及する者は、ほぼ例外なくメタファー metaphor の効果的活用注目する。たしかに、演劇、儀礼、ゲーム、交通規則、額縁(フレーム)など、対面的相互行為の分析にあたってゴフマンが駆使した理論装置はみな、すぐれてメタフォリカルな特質を有していよう。しかしここでは、ゴフマンがメタファーを多用したという事実を確認したいわけではない。むしろ、テキスト

構成において、いかなる目的からメタファーが要請されているのかが明らかにされねばならない。ゴフマンのテキストにおけるメタファーが「慎重に選び抜かれた武器」(Manning,1980:263)であるとすれば、その照準の方向をこそ見定めておく必要があるだろう。

ゴフマンの著作にスタイルという側面からいち早くアプローチしたJ. ロフランドは、ゴフマンのテキストにおけるメタファーの効果について、きわめて示唆的な論点を提出している⁽⁶⁾。ロフランドは、分析の素材や内容ではなく、分析を提示するスタイルや形式の独自性こそが、ゴフマンの著作に注目が集まった理由であるとする。そして、ゴフマンのテキストが帯びている独特の色調の淵源を、K. バークのいわゆる「不協和によるパースペクティブ perspective by incongruity」の効果にもとめている。これは、あることばを意想外の場面に適用したり、撞着しあうことば同士をあえて連結したりすることにより、見慣れた事象をべつの角度から照射する眺望を獲得する修辞的效果をさす。「あるものごとの名称を、それと似ている別のものごとをあらわすために流用する表現法」(佐藤,1978:80)というメタファーの定義と重ね合わせて考えると、「不協和によるパースペクティブ」とは、「あるものごと」と不協和的な「別のものごと」とのあいだになんらかの「類似性」をみいだすメタフォリカルな思考様式の表象にほかならない。

ロフランドによれば、ゴフマンのテキストにおける「不協和によるパースペクティブ」は、<不協和な語句 incongruous phrases>と<不協和なモデル incongruous model>という二つのレベルで実現されている(Lofland,1980:25)。ここでは本稿の素材論文に立ち返り、二つの手法を例解しよう。

<語句>レベルの例としてはさしあたって以下の二つをあげておきたい。

- ①「こうした防衛機制をもちいて、ひとは社会的な重罪——資格要件を偽って、ある地位に就くという罪 sin——を犯すことにみずから歯止めをかける」(p.485)

②「社会的役割をめぐるゲームでは、栄転、昇格、左遷のいずれもが残念賞 consolation prizes なのである」(p.494)

①の「罪」、②の「ゲーム」、「残念賞」がメタファー表現である。前者では、役割アイデンティティをめぐる虚偽の申し立てにたいしては道義的責任を問うことが暗示されており、後者では組織内人事が徒競走になぞらえられている。けれども、こうした<語句>レヴェルのメタファーじたいは、さほど新奇なものではない。「罪の意識を抱く」という表現はごく日常的にもちいられるものであり、「出世競争」という言い回しも紋切り型に属するものである。

ゴフマンのメタファーは、<モデル>として活用されるときにその真価を発揮する。本稿の素材論文では、詐欺集団の日常的言い回しである cooling the mark out が、通常使用される文脈から意図的に切断され、さまざまな社会的場面に適用されることによって、まさにメタフォリカルなモデルを構成している。【§3】では、「カモがみかけに反して特定の地位を占める資格をもっていないという事実が露呈するのはいかなる場合か？」という問いに答えるかたちで、①レストランやデパートで客がサービス内容への不満をいいたる場面、②職場や学校で、だれかが昇進に漏れたり、解雇されたり、試験に不合格になったりする場面、③交際や結婚の申し込みを相手に断られる場面が、順次例示される(pp.490-2)。①では客が「カモ」でウェイトレスや売場監督や専従の苦情処理係が「なだめ役」にあたる。②では選抜にもれた社員や不合格の受験生が「カモ」、悪い知らせの告知担当者が「なだめ役」となる。③では申し出を断られる側が「カモ」、断わる側が「なだめ役」を担当する。こうして、もともと互いに無関係で共通の特徴をもたない三つの社会的場面が、「カモ」と「なだめ役」という配役の共通性を結び目として同一の原型のヴァリエントという位置づけを得ることになる。場面への参加者を「カモ」と「なだめ役」へと分析的にカテゴライズすることによって、三つの場面の「同型性」が見いだされ、cooling the mark out モデルの発見的な heuris-

tic 効果がみごとに引き出されているのである。

(2) 列挙法

ロフランドを嚆矢として、ゴフマネスクをめぐる議論ではメタファーの頻用への言及がなかば慣例となってきた(Manning, 1980; Williams, 1983; Smith, 1989)。そうしたなかであって、ゴフマンのレトリックをべつの角度から検討する視点を提示したのは、P. アトキンソンである。アトキンソンは、ゴフマンのテキストにおいては、メタファー的レトリック(撞着語法 oxymoron や反語法 irony を包摂する)ではなく、配列法的レトリックがむしろより重要であると指摘する(Atkinson, 1989:73-4)。アトキンソンの規定によると、配列法とは「反復 repetition, 並列法 juxtaposition, 対句法 antithesis, またはそれらの方法の合成によって議論を構築する」修辭的技法である(Atkinson, 1989:63)。アトキンソンはゴフマンのテキストから配列法の使用例を豊富に抽出しているが、ここではとくに、かれが「羅列の修辭的効力 the rhetorical power of lists」(Atkinson, 1989:71)として言及している列挙法 enumeration の重要性に着目したい。列挙法とは配列法の下位範疇に帰属し、「さまざまの同格のことばを次から次へとならべたてていく表現」と規定される(佐藤, 1978:209)。まず、素材論文における列挙法の使用例をあげてみよう。

- ①「われわれの社会のあらゆる分野で、黙って同情の見せかけをつくり、カモの気持ちがりっかり収まるまでその言い分を聞いて、苦痛や衝撃を緩和する人びと——ビルの管理人、レストランの接客係、労働争議の調停委員会、売場監督、などなど——の役割は、こうした見通しをもって遂行される」(p.495)。
- ②「このことは、われわれが社会的能力の一つ一つに関して死に赴く方法や死に送られる方法、いいかえると、その役割をもっている状態からもはやそれをもたない状態への移行を取り扱う方法の考察を促す。馘首や一時解雇、辞職や辞職勧告、告別や別離、国外追放、破門宣告、収監、ゲームでの敗北、競技会、戦争、

友人の交際圏や親密な社会関係からの疎隔、企業倒産、定年退職、あるいは遺産相続人に利益をもたらす死、などといったさまざまな社会過程を考察してみてもよからう」(p.503)。

①では自己イメージを傷つけられた「カモ」の感情を気のすむまで表出させる戦略を採用する「なだめ役」であるという共通性、②ではある人物を「カモ」の立場に陥れる社会過程であるという共通性によって、それじたいは無関連なことば同士が束ねられている。

佐藤信夫は列挙法を「ことばの外形をその意味内容ににせるころみ」と特徴づけ、とりわけ「混乱あるいは繁盛をことばで造形する」ことに適合した表現形式であると述べているが(佐藤,1978:212)、ゴフマンのテキストにおける列挙表現が、社会的場面の多様性とそれらを貫通する共通性とを、同時に描出する効果をうんでいることに注意しよう。つまり、ゴフマンの列挙表現には事象を特定の視角から整序しようとする含みがある。

認識的效果の観点からみると、本節で取りあげたメタファーと列挙法という二つの修辭的技法のあいだには、共通の志向性を見いださう。アトキンソンの示唆的な発言に注目したい。

[ゴフマンのテキストでは、]「風変わりなもの、ありきたりのもの、上品なもの、逸脱的なもの、嫌悪の対象と賞賛の対象、大衆的なものと学問的なものが、並置され、混ぜ合されることにより、読者はテキストにたいする共感的関与を促され、同時に挑発される」(Atkinson,1989:74 強調は引用者)。

列挙法の効果は、みずからの主張に説得性を付与するだけにとどまらず、「不協和によるパースペクティブ」によって読者の自明的認識に攪乱を引き起こすことにもある。たとえば【§8】では、社会生活における重要な関与(家族内役割や職業など)を失った人びとが行き着く「墓場 graveyard」として、刑務所や精神病院、退職者の集住地区や老人ホーム、スラム街が並べ立てられる

(p.504)。つまり、ゴフマンのテキストにおいては、不協和的要素の結合による視座構造の転換を実現すべくメタファーと列挙法とが相補的に機能し、各自の効果を倍加しているとみることができる。もう一つ例をあげよう。【§4】の②では「カモ」に失った関与を代替する関与を提供するという cooling out の方法の例示がつぎのようにおこなわれる。

「恋人が友人になってくれと頼まれたり、医学生が歯科医への進路変更を求められることがある。ボクサーがトレーナーになることもある。(中略)実直な警察官は一人きりの巡回区域に配置換えになる。熱心すぎる聖職者は修道院に入るよう勧められる。仕事のできない工場長はべつの部局に追いやられる。『カモ』が『祭りあげ』られたり『副社長』のような名誉職を授けられることもある」(p.494)。

ここでは、<失った関与>を<代替的関与>で埋め合わせるというカモの自己イメージ修復のモデルが互いに無関係な社会的場面につぎつぎと重ね合わされることにより、メタファーと列挙法が相乗効果をうみ、「代替的関与の提供」が広範に適用される cooling out の一様式であることが説得的に示されている。このように、不協和な社会的場面を重ね合わせることによって(メタファー)、あるいは並べてみせることによって(列挙)、読者の視座構造に転換を引き起こそうとする点に、両者の共通性をみとめることができよう。これら二つの手法の背後には、雑多な社会的事象のうちになんらかの共通的要素を探りあてようとするゴフマンの志向性を透かしみることができる。

4. 形式化への志向

多様な社会的場面を列挙法によって描出しつつ、なおかつそこに貫通する類似的要素をメタフォリカルに浮かび上がらようとするゴフマンの著述スタイルは、日常生活における対面的相互行為 face-to-face interaction を固有の社会学的探求領域として画定するというかれのモチーフにきわめて適合的であった。ここで「固有の」とは、日常的

相互行為の分析はマクロ理論の帰納的構築の礎石にとどめてはならず、それじたいのもつ秩序や規則性を解明するという課題にむけておこなうべきだという、ゴフマンが終生保持した基本姿勢をあらわしている。論述の行程でしばしばもちだされる「例示 illustration」をめぐるゴフマンの独特の方法意識は、そうした基本姿勢の必然的帰結であった。ゴフマンは、社会学的著作における通常の「例示」慣行にたいする違和感を隠さない。社会制度や社会構造、あるいは特定の社会総体にかんする著作において対面的相互行為が引き合いに出されるのはもっぱら、著作者が具体的な社会生活への目配りを忘れていないことを読者に示す「例示」という文脈に限定されている⁷⁾。こうした慣行にたいし、ゴフマンはつぎのように主張する。

「かくして、相互行為の実践はほかのものごとを例示するために利用されてきたが、それじたいはあたかも明確な規定を与える必要のないもの、与えるに値しないものであるかのように扱われてきた。けれども、こうした出来事のもっとも適切な利用法は、もろもろの出来事じたいに通有的な generic 特徴を解明することなのである。」(Goffman, 1971: ix)。

ゴフマンのテキストのなかには、多様な社会的場面から抽出された対面的相互行為がつぎつぎと引き合いに出され、「例示」される。それら出来事の細目 detail を可能なかぎり捨象せず、同時に出来事間の通有的特質を析出する、という課題を実現するためにゴフマンが採用した分析戦略は、「類型化 typification」という手法に集約することができる。

素材論文においても、「関与」喪失の社会的場面が昇進・退職・不本意な剥奪の三つに類型化され(【§2】)、cooling out にあたって一般的に採用される六つの方法が類型化され(【§4】)、cooling out を拒んだ「カモ」がとりうる五つの方策が類型化され(【§5】)、さらに cooling out の場面を回避する戦略が、「詐欺師」「社会通念」「カモ」という三つの立場から合計七つに類型化される(【§6】)。また、【§8】では、特定の関与を失ったあ

との人びとの身の処し方として、当該関与を保持している人びとから切り離された社会的世界に行動圏をうつすばあいと、同一の社会的世界に紛れ込んで生活をつづけるばあいが分節され、行動圏の分離は地理的・空間的分離/制度的・職業的分離に、行動圏の混合は上昇移動/下降移動へと、それぞれさらに下位分類が施されている。このようにみても、テキスト全体が、逐次提出される問題を類別し、形式化をつうじて整序する作業として緊密に構成されているとさえいえる⁸⁾。

類型の累積と連携作用によって議論を構築するというゴフマンの分析スタイルは、読者に一つの疑念を喚起することになる。それは、提示された類型が分析すべき状況の諸特徴をはたして十分に網羅しているか、という exhaustiveness にかかわる問題である。ゴフマンの分析スタイルには体系化志向が不在であるという指摘は、つとに提出されてきた。ロフランドによれば、ゴフマンは、データに密着し、素材をしてカテゴリーを語らせることに腐心する一方で、類型間の論理的関係をさほど重視していない(Lofland, 1980: 31)。P. K. マニングは、ゴフマンの関心が、合切袋のような分析装置をつくりあげるのではなく、むしろ一揃いの概念群が当面の分析にとってどれだけ生産的かという点にあったという(Manning, 1980: 268)。R. ウィリアムズは、分析トピックの選択とその展開が恣意的であるというゴフマンへの批判的評言⁹⁾にたいし、ゴフマンの意図は概念をしかるべき場所に固定化して収納することではなく、概念の適用範囲を示すことにあったと反駁している(Williams, 1988: 80)。これらの見解は、ゴフマンにおける類型や概念のプラグマティックな性質に論及している点で一致する。

ゴフマンはまた、有限個の概念や類型で無限に多様な社会的世界を描きつくすことができるとはそもそも考えていなかった。対面的相互行為における規則や秩序の解明にあたって、実験をつうじて変数間の相関関係を特定したり、仮説検証的に概念を構成する方法を採らない理由について、ゴフマンはつぎのように語っている。

[そうした方法では]「社会的活動についてのわれ

われの見方を再整序 reorder する諸概念は創発してこなかった。たえず累積をつづける事実をそのなかに位置づける枠組みは確立されてこなかった。日常的行動についての理解は蓄積されず、むしろそこからの隔離が広がってきたのである」(Goffman, 1971:xvi)。

この発言を裏返せば、それはそのままゴフマンが志向した方法の含意となろう。すなわち、概念は社会的世界にたいするわれわれの自明性構造を「再整序」するものでなければならぬし、分析にあたって提示する枠組は、分析者の面前にたえず立ちあらわれる数多の事象になんらかの位置づけを与えうる柔軟性を備えていなくてはならない。ゴフマンの採用した「自然主義的研究 naturalistic study」では、日常的相互行為の断片を類型化し、概念へと鍛えあげながら、漸次的に対象の把握に向かう姿勢が堅持される。分析はどこから開始してもよいし、どこで中断してもよいが、決して「終わる」ことはない⁽¹⁰⁾。メタファーと列挙法による「不協和によるパースペクティブ」の開拓、類型の累積的提示による議論の構成といった著作スタイルは、相互行為秩序の自然主義的解明というモチーフにとって、いわば必然的に要請されたスタイルであったといえるのではないだろうか。

見過ごされがちな細目的現象のなかから普遍的に妥当する原理を抽出しようとする。さまざまな社会化の形式を同定・分類し、諸形式の特性や下位類型を分析すること。他者についての知識の不完全性を自覚するがゆえに考究にあたって類型化を媒介とすること。ゴフマンはこれらの方法的特徴を、形式社会学者 G. ジンメルと共有する (Smith, 1989:23-28)。G. W. H. スミスは、行為者の主観的な意図や動機の内容ではなく投企された行為の客観的效果に照準する点に、ゴフマン社会学の「形式性」をみとめる (Smith, 1989:37)。「なだめ役」を演じる人物は、「カモ」のやけっぱちな行動による不利益を回避しようとする詐欺師かもしれないし、不首尾をおかした「カモ」の自己イメージの救済に衷心から配慮する友人かもしれない。ここでは、cooling out という相互行為

形式の成立に参加者が込めた主観的意図や動機はさしあたって不問にされ、cooling out の効果的達成をめざす方策へと、視線が定められている。

ジンメルと同様、ゴフマンはみずからの社会学的営為の目的を論理整合的・演繹的・自己完結的なグランドセオリーの構築にはおかず、「粗野な経験主義 the crude empiricism」(Goffman, 1981:62)の立場を堅持した。しかしながら、多元的な社会空間に散在する諸事象を整序し、それらに通有的な特質を暴き出す手続きについて、最初期からすでに明確な方法意識をもっていたことは本稿の検討からも明らかである。「ゴフマンの社会学は体系的な意図を示しているが、体系の構築へ向かうとはしない」とするスミスの評言 (Smith, 1989:52)は、このあたりをよく言い当てている⁽¹¹⁾。身辺で生起するごく些末で雑多な出来事も、ゴフマン的な方法を適用すれば社会学的考察の対象となりうる。たとえば、cooling out というモデルを提示されたわれわれは、<連打を浴び、肩を落として降板した投手をベンチ裏で迎えるコーチ>や<コンテストの本番でユニゾン・パートの音をはずしたプレイヤーにバックステージで声をかけるバンドリーダー>といった社会的情景に、おなじモデルを重ね合わせることができる。

ゴフマンのテキストは、ある事象についての委曲をつくした完璧な説明ではなく、広範な領域に適用することが可能なモデル(類型や概念)を読者に提示する装置として組み立てられている。読者は、ゴフマン的なモデルを適用した社会学的分析をこんどはみずからの手で展開し、類型や概念にいつそう磨きをかけるよう促される。著作者であるゴフマンの「主観的意図」はここで問うべくもないが、ゴフマンのテキストの「客観的效果」の一端が、読者にたいするそうした触発性にあることはたしかである。

註

- (1) J. ディットンが作成した著作目録によれば、書評をのぞいた未収録論文は10篇に満たない (Ditton, 1980:7-11)。
- (2) H. S. ベッカーは、ゴフマンが学術雑誌の編集者にたいし、「掲載不可能な impracti-

cal」長さの論文の掲載を頑固に主張したエピソードを紹介している(Becker,1986:130)。これは、ゴフマン的な著述スタイルの実現には一定の紙幅が必要であったことを示唆していないだろうか。

- (3) 以下、この論文からの引用はカッコ内の頁数で示す。
- (4) ゴフマンは「関与」概念を他の著作でも重用しているが、ここではそれらとの異同を検討することはせず、さしあたって素材論文における規定だけを参照することとする。
- (5) ここでは、たんなる装飾表現ではなく、認識装置としてのレトリックに着目した佐藤信夫のレトリック論(佐藤,1978;1981)をふまえてこの文体的技法に言及する。
- (6) ロフランドの論稿は、1962年に草稿が完成していた。したがって、論及の範囲はゴフマンの初期の著作に限定されている。P. K. マニング(Manning,1980)は、後期ゴフマンの著作(とくに *Frame Analysis*)を取りあげておなじ主題を考究したものである。
- (7) ゴフマンは文献の引用にも独特のスタイルをもっていた。多くのばあい、他の社会学者のテキストからの引用は、みずからの議論を理論的に補強するためでなく、そのときどきに練りあげようとする概念の具体的場面への適用例として、いわば「例示」のためにおこなわれている(Atkinson,1989:68;Williams,1983:99)。
- (8) 類型化への志向は、レビュー論文にもすでにみとめられる。そこでは、「われわれは、地位シンボル status symbol に具現化されている濫用制限メカニズム restrictive mechanisms を分類することによって、そうしたシンボルの研究にアプローチすることができるかもしれない」(Goffman,1951:296 強調は引用者)という方針の表明にしがってシンボルの使用を地位適格者に制限する六つのメカニズムが類型化され、さらに、社会状況は特定の階級が重視する、ないしは無視するメカニズムの類型にしたがって分類することが可能であると述べられる(Goffman,1951:302)。また、

概念の執拗な二項類別はここでも随所で施されている。たとえば、地位シンボルと集合的シンボル collective symbol が分析的に分節され、地位シンボルはさらに職業シンボル occupation symbol と階級シンボル class symbol とに下位分類されている。

- (9) 会話分析の手法上の精緻化を主導してきたE. A. シェグロフは、ゴフマンが利用するデータの架空性やデータ選択の恣意性を、いわば「実証主義的な」観点から徹底的に論難している(Schegloff,1988)。
- (10) 「つねに生成過程にある理論」という考え方を具体的な方法論として煮詰めたのは、B. G. グレイザー=A. L. ストラウスである。二人は、ゴフマンの諸作品を grounded theory の成果として高く評価し、すぐれた「形式理論 formal theory」の範型として本稿の素材論文を紹介している(Glaser and Strauss,1967:88-90)。
- (11) ゴフマン社会学における体系性の存在については、理論的な観点からも検討がおこなわれている(Collins,1988;Giddens,1988)。付言すれば、スミスの評言は、ゴフマンの師であるE. C. ヒューズがR. E. パークについて述べた賛辞(「かれは体系を構築しようとはしなかったが、元来が体系的な社会学者であった」)にぴったり符合する。L. A. コーザーによれば、この評言はヒューズにも妥当するものである(Coser,1994:1)。

引用文献

- Atkinson, P.
1989. "Goffman's Poetics." *Human Studies* 12: 59-76.
1990. *The Ethnographic Imagination: Textual Construction of Reality*. Routledge.
- Becker, H. S.
1986. *Writing for Social Scientists: How to Start and Finish Your Thesis, Book, or Article*. Univ. of Chicago Press.
- Brown, R. H.
1977. *A Poetic for Sociology: Toward a*

- Logic of Discovery for the Human Sciences*. Univ. of Chicago Press.
1987. *Society as Text : Essays on Rhetoric, Reason, and Reality*. Univ. of Chicago Press.
- (1989. 安江孝司・小林修一訳『テキストとしての社会—ポストモダンの社会像』紀伊國屋書店。)
- Burns, T.
1993. *Erving Goffman*. Routledge.
- Clifford, J. and G.E. Marcus (Eds.)
1986. *Writing Culture : The Poetics and Politics of Ethnography*. Univ. of California Press.
- Collins, R.
1988. "Theoretical Continuities in Goffman's Work." In P. Drew and A. Wotton (Eds.) *Erving Goffman : Exploring the Interaction Order*. Polity Press : 41-63.
- Coser, L. A.
1994. "Introduction." in Coser, L. A. (Ed.) *Everett C. Hughes on Work, Race, and the Sociological Imagination*. Univ. of Chicago Press.
- Ditton, J.
1980. "Editor's Introduction : A Bibliographic Exegesis of Goffman's Sociology." In J. Ditton (Ed.) *The View From Goffman*. Macmillan : 1-23.
- Geertz, C.
1988. *Works and Lives : The Anthropologist as Author*. Polity Press.
- Giddens, A.
1988. "Goffman as a Systematic Social Thinker." In P. Drew and A. Wotton (Eds.) *Erving Goffman : Exploring the Interaction Order*. Polity Press : 251-279.
- Glaser, B. G. and A. L. Strauss.
1967. *The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Research*. Aldine.
- Goffman, E.
1951. "Symbols of Class Status." *British Journal of Sociology* 2 : 294-304.
1952. "On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure." In A. M. Rose (Ed.) 1962. *Human Behavior and Social Processes : An Interactionist Approach*. Routledge and Kegan Paul : 482-505.
1971. *Relations in Public : Microstudies of the Public Order*. Harper & Row.
1981. "A Reply to Denzin and Kellner." *Contemporary Sociology* 10 : 60-68.
1983. "A.S.A. 1982 Presidential Address : The Interaction Order." *American Sociological Review* 48 : 1-17.
- Lofland, J.
1980. "Early Goffman : Style, Structure, Substance, Soul." In J. Ditton (Ed.) *The View From Goffman*. Macmillan : 24-51 (Original draft had been written in 1962).
- Manning, P. K.
1980. "Goffman's Framing Order : Style as Structure." In J. Ditton (Ed.) *The View From Goffman*. Macmillan : 252-284.
- 佐藤信夫
1978. 『レトリック感覚 ことばは新しい視点をひらく』講談社。
1981. 『レトリック認識 ことばは新しい世界をつくる』講談社。
- Schegloff, E. A.
1988. "Goffman and the Analysis of Conversation." In P. Drew and A. Wotton (Eds.) *Erving Goffman : Exploring the Interaction Order*. Polity Press : 89-135.
- Smith, G. W. H.
1989. "Snapshots 'sub specie aeternitatis': Simmel, Goffman and Formal Sociology." *Human Studies* 12 : 19-57.
- Williams, R.
1983. "Sociological Tropes : A Tribute to Erving Goffman." *Theory, Culture & Society* 2(1) : 99-102.
1988. "Understanding Goffman's

Methods.” In P.Drew and A.Wotton
(Eds.) *Erving Goffman : Exploring the
Interaction Order*. Polity Press : 64-88.